

白樺ゆれる

琥珀の大地

海女の国

大森絵巻地蔵



久慈の市日

久慈市の市日は、三と八の日の月六回である。昔はこれを六斎市と言った。市のたつところは中町の病院通りで両側の歩道である。

久慈の市日の始まりは、定かではないが、約三四〇年前の正保三年（一六四六年）のころと思われる。この年に、昔、久慈通と言われたころ、今の大川目の三日町が三日の日に市（町）のたつのを許されて、三日町が成立したと言われる。当時から家屋が密集していて、宿場町の形態をなしていたことは、五年後の慶安四年二月の火災で、十七軒の家屋を焼失していることと推察できる。

八の日にたつ市（町）は、旧久慈町の昔からの市日で、前に二日の町（市）であったものが、承応2年（一六五三年）に八日の町（市）となり、それ以来今日まで続いている。そして現在でも、八日町（十八日町、二十八日町）の町名が残っている。二日町であったのはいつからであるか、よくわからないが、そのころの市日が許された事情からあして、たぶん三日町と同じころと思われる。当時、久慈川流域に発達した三日町や八日町と言われた久慈は、九戸地方の発祥の地で、経済、文化をはじめ交通の要路として栄えたところである。

古老の話では、三日町の市日は明治のころまで続き、その後廃止されたと言った。戦後、昭和25年4月から、今の本町で三日市が開かれるようになった。そして、この三日市も日増しに盛んになってきたが、場所の関係で、八日市の開かれていた二八日町にたつようになり、さらに52年10月、この3と8の日の市が、中の橋通りから市道である今の所に移ったのである。

市日のことを「町」とか「町の日」とも言った。今は、年寄りや近在の一部の人を除いては、一般に市日と言っている。

平成元年十月発行

地域コミュニケーション誌「コーヒークップ」

(No.123号) 10p

筆者 元久慈湊小学校長 中澤義雄氏 記事一部掲載

八郎太郎の話し

語り・村田 永吉

むがしむがし、大川目の村の荒津前平つうとこさ、八郎太郎っていうばかに元気のいいわらすあ（子ども）いじょう。八郎太郎あ、毎日毎日野っばらあ走り回ったり、山々を駆けめぐって遊んでるわらす（子ども）いじょう。

ある日、あんまり走り疲れたので喉あ乾いて、横になってえはすくそばに小さな川ああったじょう。

澄んだきれいな水だったので、そと手を合わせて汲んだじょう。水の中に見えなかつたのに、手の上さ一匹の腹の赤い雑魚あいじょう。八郎太郎あびくりにしてもう一度汲み直したじょう。んでもまた腹の赤い雑魚あ入ってたじょう。何べんやつても同じだったじょう。そうしているうちに段々喉あ乾いてくるので思い切って飲んでしまったじょう。あんまりおいしんで飲みつづけたら川の中の水あ無くなってしまったじょう。

気あついで見たら、なんと八尺もある大男になってたじょう。それからつうもの、太郎あ水無しでは生きられないほどの水飲みになってしまったじょう。

太郎はまた喉あ乾いて来たので、その大きな足で水を探して歩き出したじょう。なにしろ一度に二十間も三十間も歩けるので、ちよつと歩くと水あ見つかったじょう。んでもあまり水あ少なかつたのでせつせと土を盛って、その小さな川あせき止めたじょう。それあ今のモッコ山つう所だじょう。歩いていこううちに、草履あ重くなつて来てよく見たら草履の裏さ土あいっぱいついてたじょう。太郎は、よいしょとそこの土をはらったら小さな丘あそこさ出来たじょう。そこあ今の草履森だじょう。

太郎は自分が一番強いとうめはれて力比べの相手つこ探がしに出かけることにしたじょう。そして北さ向って歩いて行つたじょう。腹あへつて一休みしてお昼を食べたじょう。今ではそこをヒリーバ（昼場）っていうようになつたじょう。

青森の方さ行つても、なかなか適当な相手あ見つからず歩いていたら、大きな屋敷ああったじょう。太郎あ入つて行つて力比べ申し込んだら、その主人は「ようし、この熊に知恵比べ、力比べして勝つたら相手になつてやる。」つたじょう。太郎あ腹を立てて熊と争つたじょうあ、なんのただの熊あなく神通力を持った熊だつたじょう。結局太郎は両方とも負けでしまったじょう。

主人は、「お前あ、おれの相手になるには足りない。この鉄の草鞋をやつたらこの草鞋がすり切れる所まで歩きつづけ、切れた所をお前の住む地とせよ。」つて一足の鉄の草鞋を渡したじょう。太郎は仕方なく、あつちこつち歩いたじょう。

ある日、秋田の海岸を歩つたらブーツリと草鞋あ切れたじょう。そこで近くの民家に宿をとり、年寄り夫婦が夕食をもらつて食べ終ると、またひどく喉あ乾いてきたじょう。太郎あ水が欲しくなつて、いろりに長い火はし突つ込んだじょう。するとごんごん水あ湧いてきたので、二人を近くの山さにながしたじょう。水あごんごん湧きつづけ、今の八郎湯になつて、太郎はそこを住む地として主になつたじょうあ。

〈大川目昔語り集より〉

ふしきなスギのオ（久慈市）

今の久慈市山形町の漆久保に、おかし大きなスギの木があつたじょう。

スギの木は弁天様をまつた本宮神社の境内にはえていた。ある日、久慈から船頭がお参りにきてこのスギの木を見て、船を造りたいのでゆずつてくれと言つた。「きつたらバチがあたる」と反対する人が多かつたが、「弁天様はもともと海辺にまつるものだ。せめてスギの木を海に返してやろう」と決めて、スギの木をきることにしたじょう。

それで村のきこりたちが数人がかりで斧をふるつたが、一日かかって五分の一ほどしかきりこめなかつた。次の日もきり始めようとしたところが前の日のきり口がどこにも見当たらない。二日目も同じだった。そこで今度は夜も休まずきりこんで、三日目によつやくたあすことができた。

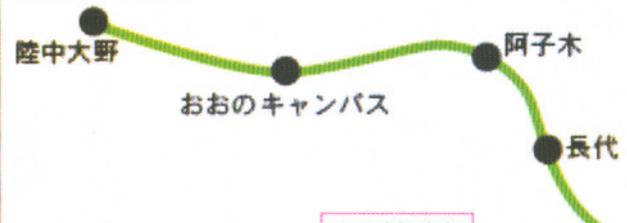
スギの木は久慈の港に運ばれ、りっぱな船に生まれ変わった。そして、沖に向つてこぎだしたところが、麦生の崎で船はびたりと止まり、船の半分まで沈んだと思うとみるみるうちに島になつてしまった。

それで漁師たちは「やっぱり神様の木だつたのだ」と話し、島にお宮を建て、弁天様をまつたじょう。

島は牛の形に似ていたので、牛島と呼ばれるようになったのだじょう。

資料 岩手県小学校国語教育研究会編著『岩手の伝説』

大野線



侍浜線



侍浜北線



侍浜南線



川代線



新町循環線



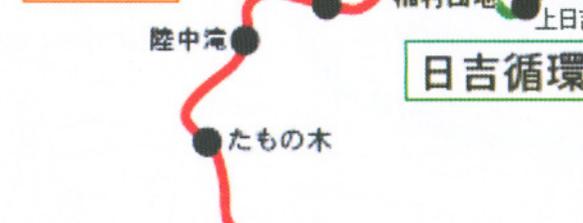
川崎町循環線



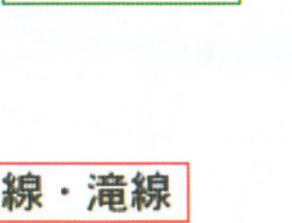
久慈海岸線



根井線



日吉循環線



山根線・滝線



市民バス路線図

